

感謝箱献金だより

ガラヤのほと 24号

感謝箱献金の歴史を振り返る

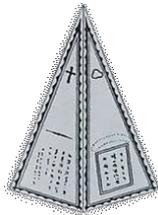
今まで歴史については、折にふれお伝えしてきましたが、若い年代の方にもご理解の上ご協力いただくために、また、改めて大切さを知っていただくために、ごく簡単にまとめました。

活動の始まり

「一致献金」(UO=ユナイテッド・オフアリング)と呼ばれていたこの運動が米国聖公会から日本聖公会に伝えられたのは1893(明治26)年。この献金運動に参加することを通して、各地方部に「婦人補助会」が結成され、1895(明治28)年に米国聖公会総会に出席のジョン・マキム夫人に託し献金の1/10を献げた。後にUTO(ユナイテッド・サンク・オフアリング)と改称されたこの運動には1970年まで参加し、献金を送り(太平洋戦争の期間を除く)、また日本の神学校や、教会・施設に多額の献金を受けている。

戦前・戦中

1915(大正4)年、日本が戦争により領土を広げたことに対して「御国の拡張」と信じ、台北教会に150円の献金をしたのが感謝箱献金の初穂と言う記述があり、名称を「婦人伝道補助会」とし台南、樺太、大連などの日本人信徒の伝道のため、教会建設や修理の費用を献金し、婦人伝道師を派遣した。



戦前の三角箱

戦後～1950(昭和25)年代

1946(昭和21)年、敗戦後の混乱の中で、開かれた役員会で感謝箱献金を再開することが決議され、1949年には感謝箱を中央本部でまとめて作成。米国聖公会へも再結成を通知し、戦後八代斌助主教に託し、2,262円を献金。1955年には須貝会長より75,000円をUTOに献げた。

1955(昭和30)年、東京在住の米国聖公会婦人信徒から27,000円の指定献金を受けた

ことをきっかけに、婦人伝道師・聖職未亡人のための施設「ベタニヤ・ホーム」の設立を婦人補助会の事業として展開することとなる。感謝箱献金の全額を設備・運営のために献げることが決議された時期もあった。



1950年作成

1960(昭和35)年代

1962(昭和37)年の総会において1割を一致感謝献金(UTO)とし、3割を「ベタニヤ・ホーム」に6割は各教区婦人会に変更することが決まる。

1963年に全聖公会大会で提唱されたMRI運動(「キリストの体における相互責任と相互依存」という宣教理念)に対しても感謝箱献金より奉獻。

1970(昭和45)年代

1973年～1975年、MRI分をパプアニューギニア教区と聖公会南アジア協議会のために献金。1977年には「感謝箱献金総額の55%をベタニヤ・ホームに45%を宣教協働に」となり、ウィリアムス主教記念基金、ACWCなどに献げた。1977年には「感謝箱献金の55%はベタニヤ・ホームに、45%を宣教協働に」を再確認。しかし1980年に「ベタニヤ・ホーム」が社会福祉法人となり戸塚に新築移転となったことで、ベタニヤ・ホームへの感謝箱献金からの拠出は終了(累計約750万円)。以降は後援会会員として各自が支援を続行。

1980(昭和55)年代

「日本聖公会婦人会に送金された感謝箱献金は海外の宣教・協働のため、殊にアジア・アフリカ地域の宣教・自立のために献げる」という理念のもと、アジア学院、西アフリカ・ガーナ、北フィリピン教区、東マレーシア・クチン教区などの教会建設や神学校、韓国木浦の孤児養護施設、在韓被爆者、バングラデシュの看護指導など多岐にわたり、献金することが出来た。1989年には、「国内宣教」にも献げることが決まる。

1990(平成2)年以降

南アフリカ「アルディ・ナウペポ」「アジア保健研修所」「南アフリカヘレン・ジョセフ女性発展センター」なども加わり、国内では「国際子ども学校」、「可児ミッション」「聖公会生野センター」「難キ連」などがおかげ先となっている。

また、阪神淡路大震災、東日本大震災、九州地震にも、緊急支援及び、その後支援のために拠出している。感謝箱献金事務局(コア)は2007年に起ち上げられ、京都教区センターを経て、2012年に横浜教区聖アンデレ教会に移転、活動を続けている。



現在の感謝箱

ガリラヤのほitori 24号



感謝箱献金事務局は、準備委員会が熟慮の結果2007年に京都教区センターに設置され、2012年、横浜聖アンデレ教会に移転し活動を続けています。起ち上げ当初のスタッフ大岡左代子司祭、井田涼子姉より、感謝箱に対する思いなどお寄せいただきましたので、掲載いたします。

司祭 セシリア 大岡 左代子

2007年からの5年間、最初のコアスタッフとして働かせていただいたことを今、懐かしく思い起こします。“かつて日聖婦がベタニヤ・ホームの働きを支えたような、そんな働きができればいいな” “お献げ先との関係の構築” “各地からの感謝箱献金に寄せる思いを大切に” いろいろな思いが集められて始まった感謝箱献金事務局(コア)でした。大幅な組織の改革のため、各教区婦人会では戸惑いもありました。そのためにいろいろな教区へ出向いて、感謝箱献金の歴史や意味、コア設立に関する経過説明をさせていただいたことも貴重な体験でした。そこで皆さんと共有したいと願ったことは、献金を送るだけではなく互いに顔の見える関係を構築することの大切さ、また感謝箱献金の祈りやお献げ先の原則にこめられた献金の意味でした。祈りや原則には、婦人会はただ献金を集めるだけではなく、誰と歩みたいのか、どのように歩みたいのかということが示されているからです。

「金額の多寡ではなくいつも私たちのことを思ってくれる人の存在が力になる。」インドで聞いた言葉です。“この人々との交わりを通して共に生きるものとならせてください”と、これからも祈り続けたいと思います。

マルタ 井田 涼子

「日本聖公会婦人会の存在目的は?」婦人会の歴史の中で何度も問い返され、その中から「感謝箱献金を活動の中心とし、感謝箱献金事務局(コア)を立ち上げる。」ことが決まりました。わたしはこの立ち上げと事務局のスタートに関わらせていただきました。

感謝箱献金はとてもシンプルに、「神と隣人を大切に下さい」というイエスさまの命令を実行できる素晴らしい道具です。日々の感謝を祈りとともに献金箱に入れる。大人も子どもも誰でも参加できます。多くの人の思いが集まることでわたしたちは今、世界のどこかで助けを必要としている人たちを応援することができます。そしてお互いに「心配しています。大丈夫ですか?」と祈り合う関係が広がっていきます。実際に東日本大震災の時、インドから、バングラデシュから、ウガンダから次々に「祈っています」とメールが届きました。このような顔の見える関係を築いていくのはお献げ先と直接に関わる感謝箱献金事務局(コア)の働きです。そして感謝箱献金の精神—イエスの宣教に参加する婦人会、その意味を語り続け広めていくこと、それは日本聖公会婦人会の大きな働きのひとつです。感謝箱はすでに与えられています。たとえばですが「感謝箱献金週間」を決めて日本聖公会全体に婦人たちみんなで「イエスの宣教に参加しましょう」と呼びかけるのはどうでしょう。楽しい企画が生まれることを願っています。

コアスタッフ人数改正のお知らせと自己紹介



2016年の日本聖公会婦人会第25(定期)総会において、会則変更の議案が提出され、コアスタッフの人数が1~2人となっていたのを「人数は定めない」と改正されました。従来のスタッフ2名(土屋・光益)に加え、これまで「準スタッフ」であった4人は「正スタッフ」として、コア運営委員会と役員会で選任されましたので簡単に紹介いたします。 <写真左より紹介>



ルイス 相宮 陽子 横浜山手聖公会

お献げ先を通して、そこにいる方々の生活に思いを馳せています。

エステル 近藤 順子 横浜聖アンデレ教会

各教会、教区婦人会、お献げ先等からのお便りを楽しみに読んでファイルに整理しています。

セシリア 金子 みどり 林間聖バルナバ教会

先人たちの篤い祈りと働きを知り、継承していくことの大切さを感じています。

ロイス 斎藤 なぎさ 藤沢聖マルコ教会

困難を抱える方々を様々な方法を駆使して親身に支援なさっている方々を知りました。